村道４号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

塩ノ井 山ノ神遺跡

2003

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

村道４号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

塩ノ井 山ノ神遺跡

2003

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

16－3

16－7

16－4

16－5

16－6

1. 1号住居址出土土器
2～6. 1号住居址出土墨書土器

序

本報告書は、塩ノ井山ノ神地籍の村道４号線の拡幅工事にあたり、11月19日（月）より11月22日（木）まで試掘調査、11月26日（月）～12月26日（木）まで本調査を実施した発掘調査です。

工事予定地の付近には天伯遺跡や出頭沢遺跡などがあり、また現地の事前調査で石器を採集できたことから遺跡が埋蔵されていることが予想されました。

このため試掘調査を行い、遺跡の有無の確認を行ったところ、住居跡が確認できましたので本調査に入りました。道路の拡幅分約288㎡（４ｍ幅で72ｍ）の発掘でした。

その結果、縄文時代中期中葉末の住居址２軒、及び平安時代前期の住居址１軒を確認することが出来ました。本遺跡はこれまで遺跡分布図に載っていない遺跡で、今回の調査で遺跡であることが明らかとなりました。

３軒の住居址のうち、平安時代の住居址は、農地基盤整備時の影響をあまり受けておらず、当時の食器類や貯蔵具等が良好な状態で出土しました。

調査期間が11月下旬から12月末までありましたが、12月になると数年ぶりの年内の降雪と厳しくなる寒さで調査は難航しました。私や教育次長も発掘調査に加わりましたが、担当者はじめ作業にかかわった人達の、寒風の中、根気強く、そして手際よく、しかも慎重に掘り進む真摯な姿勢に心うたれた次第であります。ここにあらためてご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

南笠輪村教育委員会

教育長　伊　藤　　修

例　　言

1　本書は長野県上伊那郡南箕輪村683－2他に所在する塩ノ井山ノ神遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は南箕輪村による村道４号線拡幅工事を契機に南箕輪村教育委員会がおこなったものである。

3　発掘調査は平成13年11月19日から平成13年12月26日までおこない、引き続いて整理作業及び報告書の執筆をおこなった。

4　土器の復元は福沢幸一氏にお願いした。

5　遺構図は１：60に統一した。

6　遺物実測図は１：３、１：４を基準にしているが、小個体の場合に１：２とした。

7　調査・整理にあたっての出土遺物及び図版類は南箕輪村教育委員会で保管している。

本文目次

序

例　言

第１章　遺跡の立地と環境……1

　第１節　遺跡の位置……1

　第２節　自然環境……2

　第３節　歴史的環境……2

第２章　調査の経緯……6

　第１節　調査の契機と経過……6

　　調査日誌……6

　第２節　調査の体制……9

　　発掘調査……9

　　整理作業……9

第３章　遺構と遺物……10

　第１節　縄文時代の住居址……10

　　２号住居址……10

　　３号住居址……12

　第２節　平安時代の住居址……15

　　１号住居址……15

　第３節　その他の遺構……19

　　土坑１……19

第４章　総　　括……20

　引用参考文献

　図　　版

第１章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置

塩ノ井山ノ神遺跡は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷北部の天竜川右岸、南箕輪村683番地２他（字山ノ神）に位置している。天竜川により形成された河岸段丘の最上段に位置する遺跡の標高は706mで、遺跡の一帯及びその西側は上伊那郡内屈指の水田地帯がひろがっているほか、経ヶ岳をはじめとする木曽山脈を一望することができる。

第１図　遺跡位置図（１：20,000）

第２節　自然環境

南笠輪村は長野県伊那盆地北部の広く開けた地域の天竜川右岸に位置している。地形的にみると西に位置する木曽山脈経ヶ岳山地群に属する経ヶ岳南東部の飛地を除いては、その麓を扇頂とする扇状地と天竜川により形成された沖積地から成っている。

扇状地は一部天竜川、小沢川の複合扇状地になっているが、ほとんどが大泉川により形成されたものである。山麓から段丘突端部までの幅は最大で約4.5km、標高は700mから900mに及び、東へ約２度のゆるやかな傾斜地となっている。

扇状地扇端部は、雛壇状に段丘が形成されている。また、扇状地特有の湧水からなる小河川の浸食により形成された沢が10箇所みられる。

天竜川沿いに続く河岸段丘は最大で標高差約40mを測り、一部には断層の影響を観察できるところがあるため、その地形形成は大泉川や天竜川等の河川の浸食だけではないことが推定される。

自然水系としては西の山地より流れる大泉川・大清水川・戸谷川があるが、これらの河川は扇状地扇央部では伏流し水量が激減するが、扇端部付近で再び湧出する。この他に扇端部の段丘崖を源流とする北沢川・南沢川・滝ノ沢川等の小河川が天竜川に流れ込んでいる。これら小河川の湧水は水量及び水温が比較安定しているので、現在ではそれを利用したワサビ栽培が行われている。この扇端部からの湧水の水量と水質は、昭和３年に扇状地を横切る形で造られた灌漑用水幹線水路である西天竜水路の完成と、それに伴う大規模な開田により変化したといわれる。

沖積地は昭和27年から29年にかけて実施された土地改良事業により大規模な水田地帯となったが、それ以前は天竜川により形成された自然堤防による後背湿地と扇状地扇端部からの湧水により、幾つもの沼が点在する大湿地帯であった。近年この地域は宅地化がすすんでいるほか、国道153号線笠輪バイパスの建設がすすめられている。

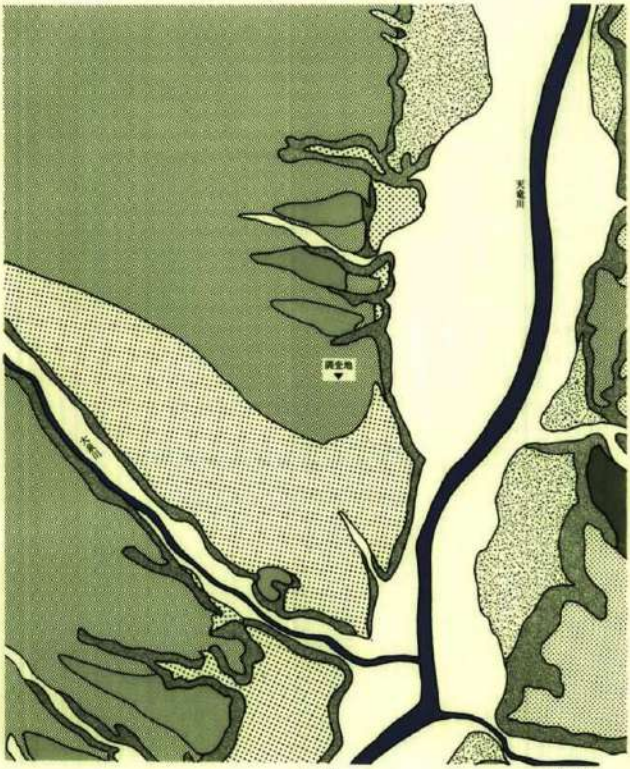
第３節　歴史的環境

南笠輪村には現在確認されている遺跡は50を数えるが、そのほとんどは扇状地を東流する大泉川・大清水川・戸谷川の両岸と、扇状地扇端部の天竜川右岸段丘上に位置している。また、天竜川沖積地には北隣の笠輪町から広がる笠輪遺跡がみられる。

これらのなかでも著名なものが「神子柴遺跡」である。神子柴区大清水地籍に位置する同遺跡は昭和33年に旧石器時代の遺跡として発見・調査され、神子柴型石器一括（国重要文化財指定）の検出をみた。

縄文時代では、これまでに天伯遺跡・大芝東遺跡・北高根Ａ遺跡・高根遺跡・南高根遺跡など主に中央自動車道建設に伴う発掘調査により遺構・遺物が確認されている。これらの調査では前期以前の遺構は確認されていないが、神子柴遺跡の第３次調査で押型文土器・茅山式土器の破片が出土している。また、大芝東遺跡・南高根遺跡・北高根Ａ遺跡においても早期末から前期にかけての木島式・天神山式等土器片が出土している。

住居址等、集落が想定できる遺構は天伯遺跡・大芝東遺跡・北高根Ａ遺跡で確認されている。これらは前期から中期末にかけてのもので、量的には中期のものが圧倒的に多い。この他に平成７年に調査が実施され


調査地
天竜川
凡　例
1：25,000
低位段丘面Ⅱ
低位段丘面Ⅰ、新期扇状地　下位
低位段丘面Ⅱ
中位段丘面、中期扇状地　下位
中位段丘面、中期扇状地　上位
段丘堆積層、扇状地堆積層
低位段丘面Ⅰ、新期扇状地　上位

第２図　地形・地質区分図

た久保上ノ平遺跡は中期中葉～中葉末にかけての拠点的集落であったことが確認され、祭祀的な色合いが強い遺構・遺物が多く出土した。後期のものは現在のところ遺構・遺物ともに確認されていない。

晩期では遺構の検出はないものの、神子柴遺跡・南高根遺跡・久保上ノ平遺跡で土器片が出土している。弥生時代では同時代の遺跡数が少ない上、検出された遺構・遺物も多くはない。天伯遺跡・北高根A遺跡・北垣外遺跡・久保上ノ平遺跡で中期から後期の遺構・遺物が検出されている。久保上ノ平遺跡からは住居址の他に方形周溝墓群が検出された。また、沖積地の笠輪遺跡からは住居址及び水田区画の検出は出来なかったものの、それらの存在をうかがわせる畦畔・水路跡・土器・打製石斧・石鏃等の遺構・遺物が出土している。

古墳時代では、子持勾玉と直刀が出土したと伝えられる丸山古墳が造営されているほか、北垣外遺跡より扁円胴形土製品が出土し、古墳時代屋内祭祀関連の資料の追加をみた。また、天伯遺跡においては、9軒の住居址が検出され、そのなかから脚部を欠いてはいるが須恵器の高坏が出土している。

なお、発掘調査によるものではないが宮ノ上遺跡より初期土師器高台付壷や五鈴鏡など注目すべき遺物が出土している。

奈良・平安時代をみると、集落はさらに村内各河川の河岸段丘周辺を基軸にしながら西方の山麓付近にまで広がりをみせるようになる。古代東山道との関連も含め、今後の検討課題の一つである。

また、宮ノ上遺跡からは平安時代、9世紀後半の火葬焼骨が埋葬された石組の墳墓がほぼ完全な形で出土している。焼骨を埋納してあった灰釉陶器短頸壺は完形で出土し、村指定文化財となっている。

中世には天竜川右岸の段丘縁辺にその地形を利用して、櫛木城・中込城・倉田城・有賀城・内城などの城館が築かれている。

第1表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地名	時代 旧石	縄文	弥生	古墳	平安	中世	備考
1	塩ノ井山ノ神	塩ノ井		○			○		
2	久保上ノ平	久保		○	○	○	○		平成7年度調査
3	久保下	久保				○			
4	南垣外	久保		○	○				
5	天王原	久保					○		
6	向垣外	塩ノ井		○	○	○	○		
7	笠輪	塩ノ井・久保木下・三日町		○	○	○	○	○	昭和57年～平成6年度調査
8	山の神	中込		○	○				
9	天伯	塩ノ井		○	○	○	○		昭和42年度調査
10	塩ノ井	塩ノ井			○				平成6年度調査
11	内城	北殿		○		○			
12	出頭沢	塩ノ井		○			○		
13	垣外	塩ノ井		○					
14	大泉	大泉			○	○	○		
15	西垣外	北殿		○	○		○		
16	北垣外	北殿			○	○	○		平成2年度調査
17	柴宮	北殿		○					
18	大泉下	南殿		○					
19	秋葉神社	北殿		○	○				
20	宮ノ上	南殿		○		○			平成元年調査
21	羽場	田畑		○					
22	田畑	田畑		○					
23	神子柴	神子柴	○	○			○		昭和33年度・平成10年調査

第3図　周辺遺跡分布図（1：20,000）

第２章　調査の経緯

第１節　調査の契機と経過

村道４号線は南北に村内を通る国道153号線の塩ノ井区から村内の西方に位置する大泉区へ通じる東西方向に延びる道路で、国道から河岸段丘の最上段に至る間は入沢川に沿って道路が設置されている。

この入沢川の両岸にはいくつかの遺跡が確認されているが、なかでも昭和42年に発掘調査が実施された天伯遺跡からは縄文時代中期・古墳時代後期・平安時代の集落が高い密度で検出され、入沢川周辺の河岸段丘上には広い範囲にわたり遺跡がひろがっていることが予想されていた。

平成13年度、村で村道４号線の拡幅工事が実施される事になり、村建設課より教育委員会へ拡幅予定地の遺跡の有無の照会があった。

これを受けた教育委員会は、拡幅予定地は未周知の場所であったが周辺に遺構密度の高い天伯遺跡をはじめとするいくつかの遺跡が点在していることや、予定地付近において過去に遺物の採集があったとの地域住民からの話があったことから、道路拡幅予定範囲の試掘調査を実施することとした。

これに先駆け、工事が実施される予定地東側に位置する水田の土地地権者により拡幅範囲内で耕土の掘削が深さ30cm前後行われており、ここから試掘調査に入る前の現地調査により石皿１点を採集した。

試掘調査は拡幅予定範囲が東から西へ向かい狭くなる形となっていたので、調査が可能な拡幅予定地内の東から水田５枚にわたる約288㎡の範囲を調査区とした。

試掘調査を実施したところ住居址３軒が確認できたことから、引き続き本調査に入った。調査にあたっては未周知の遺跡であったので、調査地の地字名から遺跡名を塩ノ井山ノ神遺跡とした。また、調査をすすめるにあたり調査区に平面直角座標第Ⅷ系（Ｘ＝0.000，Ｙ＝0.000）の原点を基準に２ｍ×２ｍのグリットを設定し、グリットの東西列をＡ～Ｙのアルファベット、南北列を算用数字とした。

調査は試掘調査を平成13年11月16日より開始し、遺構の位置を確認したのち平成13年12月26日まで調査を行った。

○調査日誌

11月

11月16日　トレンチを設置する。

19日　トレンチの掘削及び上面確認を行う。２軒の住居址を確認。１号・２号住居址とする。

20日　引き続き上面確認を行う。３軒目の住居址を確認。３号住居址とする。グリット３の西に設定したグリット４では地山まで農地基盤整備時の掘削により撹乱されていた痕跡がみられたため、調査範囲をグリット４より東側に定める。

21日　２号住居址の検出に入る。ピット６基を確認する。

12月

12月３日　２号住居址の検出を完了。写真撮影、平面図の記録に入る。

26日　２号住居址と並行して３号住居址の検出に入る。ピット５基と炉址を確認する

27日　３号住居址の検出及び土層断面の記録を行う。調査区内にＢＭの設定をする。

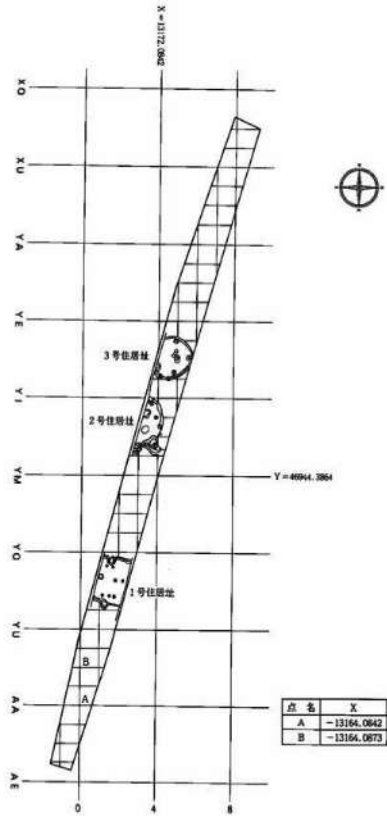
28日　２号・３号住居址の各ピットの土層断面の記録をとる。１号住居址の検出を開始。

29日　１号住居址より土師器・須恵器の遺物が多量に出土。２号・３号住居址は引き続き検出をおこなう。

４日　雨天のため作業中止。

５日　１号住居は址土層断面の記録、２号住居址は

第4図　調査範囲図（1：5,000）



点 名	X	Y
A	−13164.0842	−46924.3864
B	−13164.0873	−46928.3802

第5図　遺構全体図（1：400）

遺物の取り上げ、3号住居址は出土遺物の平面図をとる。

6日　雨天のため作業中止。

7日　2号住居址と重複している土坑の掘削開始。3号住居址は遺物の取り上げと平面図の記録に入る。

10日　1号住居址、土層断面を記録。3号住居址の測量図化完了。

11日　2号住居址の測量図化を開始。

12日　2号住居址、平面図完了。1号住居址カマドの土層断面を記録。

13日　雨天のため作業中止。

14日　午前中、昨日溜まった雨水の処理後、吹雪となり作業中止。

17日　2号・3号住居址の写真撮影と1号住居址のカマドの検出及び出土遺物の図化を行う。

18日　1号住居址の出土遺物の図化及び一部遺物の取り上げを行う。

19日　昨日に引き続き1号住居址の出土遺物の図化及び遺物の取り上げを行う。午後、作業休み。

20日　1号住居址カマド周囲の出土遺物の図化と取上げ及び住居址の測量図化を行う。

21日　降雪のため作業中止。

25日　降雪のため作業中止。

26日　1号住居址測量図化完了。カマドの精査と記録、調査地の全体測量、片づけを行って調査を全て終了する。

第2節　調査の体制

○発掘調査

調査担当者	友松　諭	（南箕輪村教育委員会　社会教育係　学芸員）
調査作業員	小沢よね子　松澤英太郎　松澤　美和（五十音順）	
事務局	伊藤　修	（南箕輪村教育委員会教育長）
	堀　正	（南箕輪村教育委員会教育次長）
	山崎　文直	（南箕輪村教育委員会社会教育係長）～H14. 3
	有賀　仁志	（南箕輪村教育委員会公民館主事）～H14. 3
	宮下　裕司	（南箕輪村教育委員会社会教育係）

○整理作業

整理担当者	友松　諭	
整理作業員	飯塚美喜子　小沢よね子（五十音順）	
事務局	伊藤　修	（南箕輪村教育委員会教育長）
	堀　正	（南箕輪村教育委員会教育次長）
	田中　聡	（南箕輪村教育委員会社会教育係長）H14. 4～

第３章　遺構と遺物

第１節　縄文時代の住居址

２号住居址

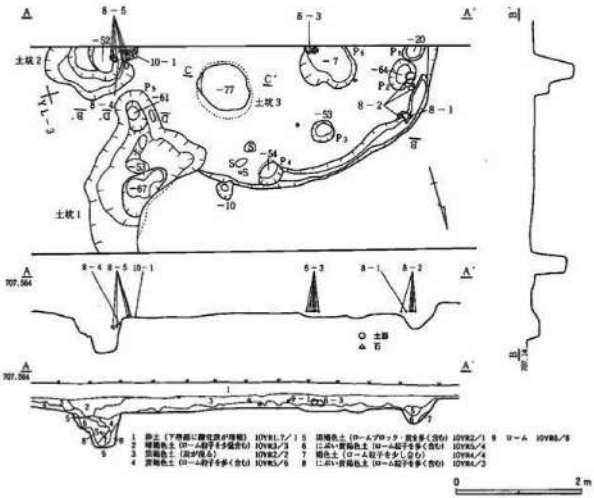
１号住居址より約11m西側のＹＬ－３付近で検出した。住居址のプランは住居の大部分が南側の調査区外にはいっているため判然としないが、楕円形を呈していると思われる。

壁残高は22cm～０cmである。壁の掘方は全体的にゆるやかな傾斜を呈しているが、北東部分で土坑１と重複しており、壁の立ち上がりは不明瞭だった。また東側においても壁の立ち上がりをとらえることができなかった。周溝は北側の壁の周辺にめぐらされ、深さは16cm～９cmとなっている。

床面はローム層まで掘り込まれ硬く叩き締められているが、検出した範囲では一部を除き撹乱により床面はほとんど破壊されている状態だった。

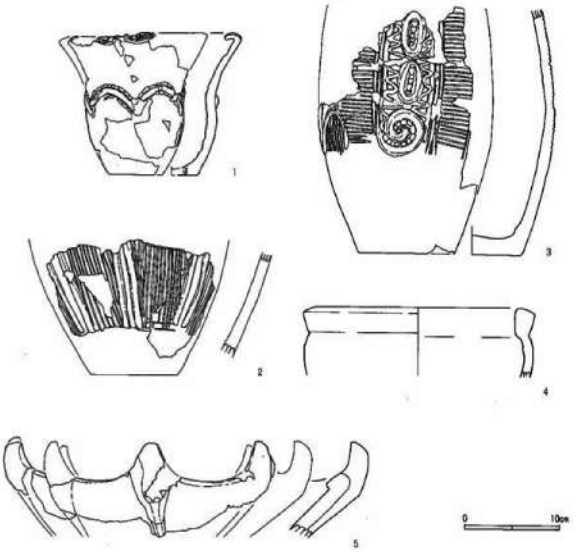
ピットは６基検出した。主柱穴はP2・P3・P5と思われる。これらの深さは64cm～53cmと安定している。P4は掘方が斜めになっており、袋状となっている。

また、住居址東側に土坑２、その西側の住居址中央部よりのところに土坑３がみられた。土坑２は不整円

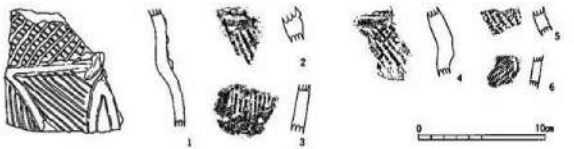


第６図　２号住居址実測図(1)

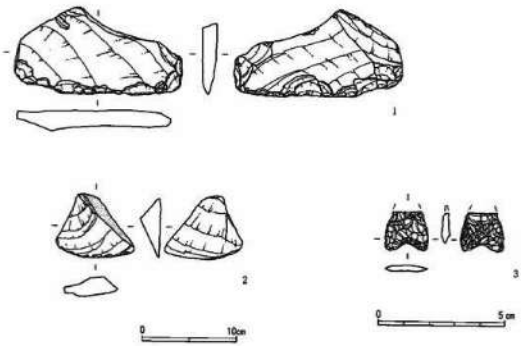
第７図　２号住居址実測図(2)



第８図　２号住居址出土土器実測図



第９図　２号住居址出土土器実測図・拓影図



第10図　2号住居址出土石器実測図

形を呈し、東側から階段状に掘り込まれ底面は平坦になっている。この土坑2と接する住居址東側床面には長さが9cm～10cm程の小石が貼床に埋め込まれるような状態でみられた。土坑2の覆土上層からは土器破片が出土している。土坑3は長軸88cm、短軸70cmの不整円形を呈しており、断面形が袋状で底面は平坦になっている。この土坑3は覆土上の一部に貼床が認められたことから掘削後、人為的に埋め戻されたことが考えられる。この土坑3からは遺物の出土はみられなかった。炉址は調査区内の検出範囲にはみられなかった。遺物は覆土及び床面直上より深鉢型土器（図8－1～図8－5）、横刃型石器（図10－1・2）、ピット2の覆土中より石鏃（図10－3）が出土している。

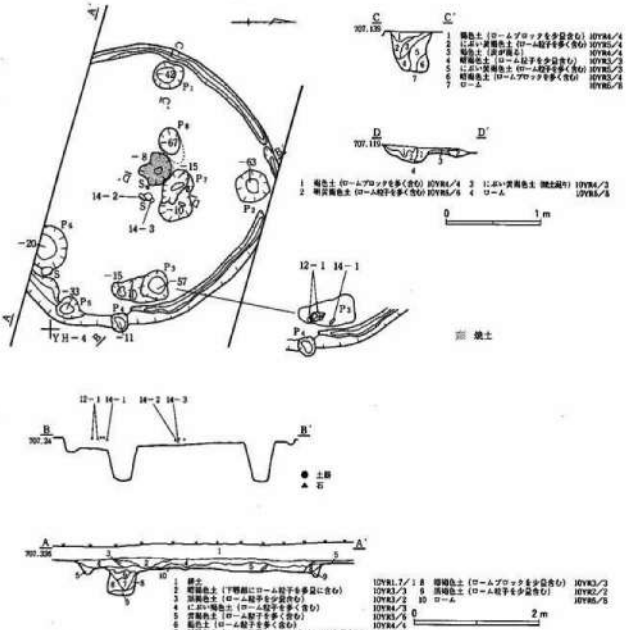
本址の時期は遺物から縄文時代中期中葉末であると思われる。

3号住居址

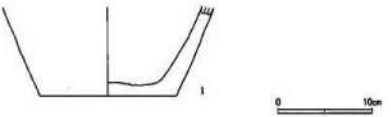
2号住居址の西側に隣接した位置、YH－4付近より検出した。住居址のプランは住居の3分の1程度が南側の調査区外にはいっているため判然としないが、楕円形を呈しているものと思われる。主軸はN－73°－Wを示すと思われる。

壁残高は12cm～6 cmである。壁の掘方は全体的にゆるやかな傾斜を呈しているが北西部分がほぼ垂直になっている。壁残高はあまりなかったものの検出した範囲では全体にわたって壁の立ち上がりをとらえることができた。周溝は壁の周辺にめぐらされ、深さは13cm～4cmである。床面はローム層まで掘り込まれ叩き締められているが、検出した範囲では東壁付近の一部を除き撹乱により床面はほとんど破壊され、凹凸が著しい状態だった。

ピットは8基検出した。このうち主柱穴はP_1・P_2・P_3と思われる。P_8は斜めに掘り込まれ断面が袋状と

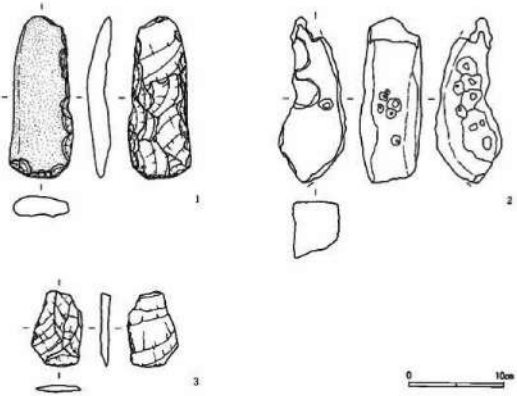


第11図　3号住居址実測図



第12図　3号住居址出土土器実測図

第13図　3号住居址出土土器実測図・拓影図



第14図　3号住居址出土石器実測図

なっている。

炉址はP1とP3のほぼ中央に位置している。炉址の種類は地床炉で長軸51cm、短軸39cmの不整円形の掘り込みになっており、深さは8cmと浅い。炉底は赤変し硬化している。炉址東側で4つの石が床面直上より出土したが、これらの石には被熱の跡は認められなかった。

遺物は少なく、住居址東側より深鉢型土器（図12－1）1点、打製石斧（図14－1）、炉址付近より石匙（図14－3）、石皿（図14－2）がそれぞれ1点出土しているほか、表面採集により覆土上層より石皿（図版12－5）がみられた。本址の時期は遺物から縄文時代中期中葉来であると思われる。

第２節　平安時代の住居址

１号住居址

調査地の東側、ＹＴ－１付近で検出した。住居のプランは住居址の南北壁が調査区外に入っているため不明であるが、長軸は５ｍ程と思われる。壁残高は東壁で24～39cm、西壁で26～29cmである。主軸はＮ－81°－Ｗを示すと思われる。東壁には住居の出入口施設とみられる長さ約80cm、幅約80cmの掘り込みがみられた。土層観察から他の遺構の重複とは認められず、この住居址に伴うものと判断した。

この部分の掘方は中間に１段を設ける階段状となっている。１段目は東から住居址内に向かって緩やかな傾斜になっており、２段目にあたる底部の段は直接床面に接地しておらず、床面より僅かに低くなっている。階段状の底面の縁りは全体的に軟弱だった。周溝は西壁と東壁の入口施設南側にみられる。深さは西壁部分で10cm～５cm、東壁部分で５cm～２cmである。

床面はローム層まで掘り込まれ叩き締められているが、住居址東側とカマド周辺の一部を除くと全体的に縁りは軟弱である。特に住居址北東部分は掘り込んだローム層にかなりの凹凸がみられ、はっきりと床面をとらえることができなかった。また、東壁付近の床面には灰褐色粘土混じりの焼土、住居址北側の床面には灰褐色粘土がみられた。

ピットは８基検出した。遺構全てを検出していないので判然としないが検出したピットから判断すると、主柱穴はP_4と思われる。また、カマド東側のP_1・P_2、入口施設と思われる掘り込み部分西のP_6・P_7がみられるが、これらの深さは12cm～22cmと浅いもののカマドと入口施設と思われる部分を結ぶ線を中心に対称に配置されピットの間隔がほぼ均等であることから、これらは支柱であると思われる。

このことからこの住居は主柱を南北中央軸に配し、東西軸に支柱をもつ２本柱の構造であることが考えられるが、住居内の壁の四隅に主柱穴がある可能性を残す。

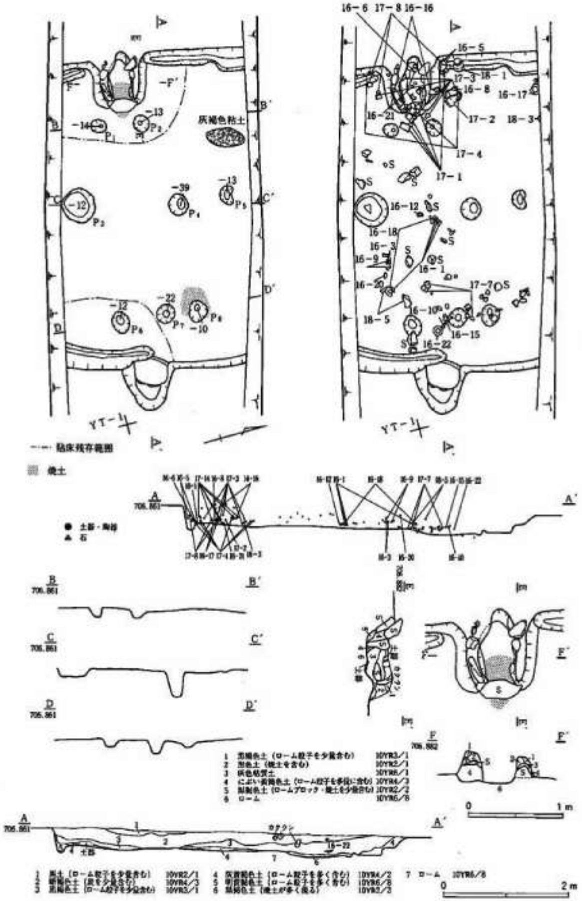
P_3・P_5についても位置的にみて本址に関連するものであると思われるが、P_1・P_2・P_4・P_6・P_7と同時期のものなのか新旧関係等があるのかは、はっきりしなかった。

カマドは西壁に構築されており、灰褐色粘質土と転石による石芯粘土カマドである。壁をわずかに掘り込み構築されている。カマドの焚口には長さ45cm、幅22cmの扁平な安山岩を敷石に据えている。また、袖全体に芯として石組がされているが、これらの石は扁平な砂岩を縦長に据えており、壁から焚口にかけて徐々に小さなものを並べている。カマド床面に焼土がみられたが、あまり広範囲には広がっていない。袖部においても火焼の影響は僅かだったが、底部の燃焼部分は赤変硬化していた。

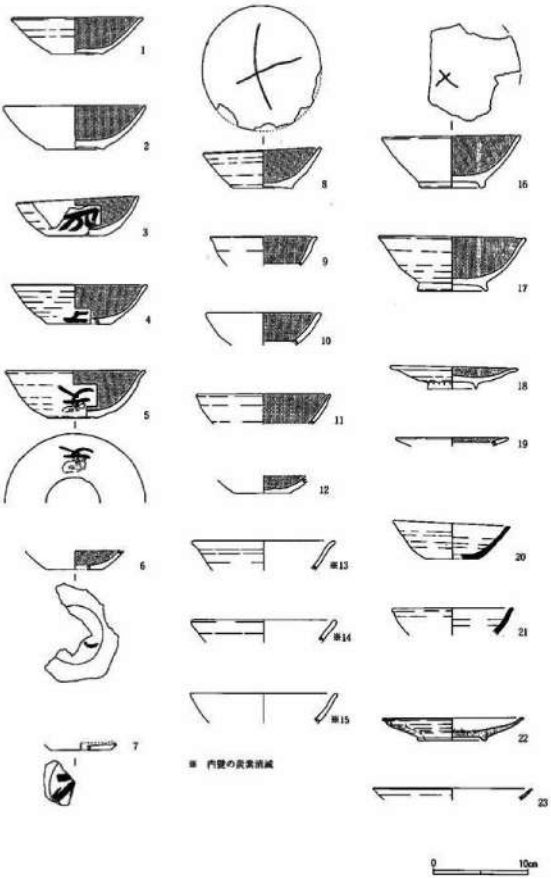
また、カマドの底部は凹凸があるものの燃焼部から壁にかけて緩やかな傾斜がつけられていた。

遺物はカマド付近と住居東側に集中して多くみられ、黒色土器（内黒）坏15点（図16－１～図16－15）、椀２点（図16－16・17）、皿２点（図16－18・19）、長胴甕６点（図17－１～図17－６）、小型甕２点（図17－７・８）、須恵器坏２点（図16－20・21）、長頸壺２点（図18－１・２）、短頸壺１点（図18－３）、甕２点（図18－４・５）、灰釉陶器椀１点（図16－23）、皿１点（図16－22）が出土しているほか、覆土中より砥石１点（図18－６）と鉄製品１点（図18－７）、鉄滓３点（図版16－８）がそれぞれ出土している。

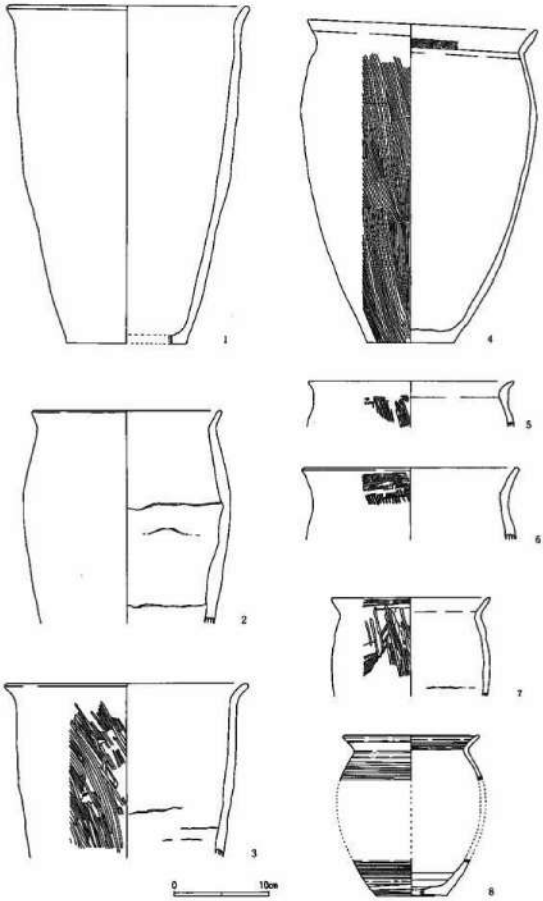
本址の時期は遺物から平安時代前期、９世紀中葉であると思われる。



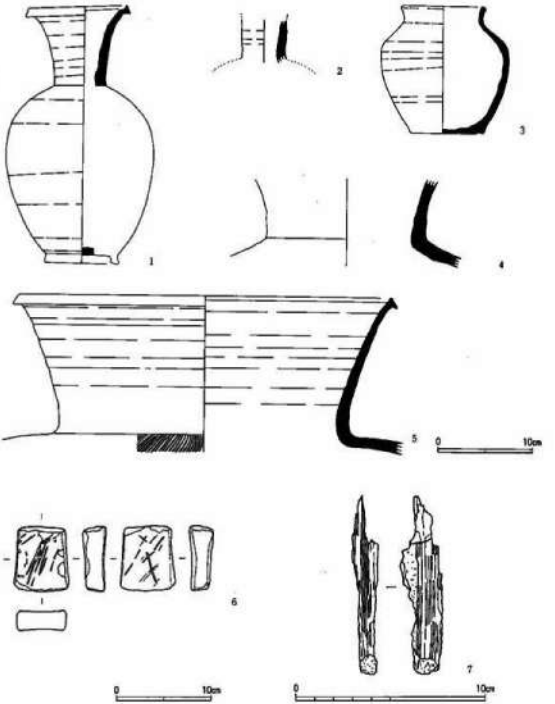
第15図　1号住居址実測図



第16図　1号住居址出土遺物実測図(1)



第17図　1号住居址出土遺物実測図(3)



第18図　1号住居址出土遺物実測図(3)

第3節　その他の遺構

土坑1

2号住居址の北東側部分と重複している。プランは北側の一部が調査区外に入っているが、不整形を呈している。掘方は東側から西側へ斜めに掘り込まれ、底面は凹凸がみられた。また、西側は段状となっている。

覆土中からの遺物の出土はなかった。時期は判然としないが、2号住居址P5の土層断面の観察から2号住居廃絶以後のものと思われる。

第4章　総　　括

今回の調査では縄文時代中期中葉末の住居址2軒と平安時代前期の住居址1軒を検出した。以下、調査結果について成果と課題をあげ、簡単であるがまとめとしたい。

成果としてまずあげられるのは平安時代前期の住居址である。住居址全体の検出はではなかったものの、この住居址からは良好な状態で食器・煮炊具・貯蔵具が出土した。この住居にみられた食器類は黒色土器が主体となっていたが、これまでの村内の調査事例と比較すると黒色土器が食器の主流を占める時期のものとしては、内容・数ともに最も充実したものになった。また、1軒の住居から出土した墨書・刻書土器の量もこれまでの村内の調査事例のなかでは最多のものであり、出土した食器全体に対し墨書・刻書のみられる土器の占める割合が約30%となっており、この住居の性格を示唆するものと思われる。

住居のつくりについても出入口施設と思われるものの検出や、焚口に敷石を据えたカマド、住居の主軸方向に支柱を置き、それに直交する中央軸に主柱を据える2本主柱建ちの構造が想定されるものであることなど、これらもこれまでの村内の調査事例にはみられなかったものであり、遺物・遺構ともに新たな資料の追加をみたことの意義は大きいと考える。

この住居址の帰属時期は遺物から9世紀中葉のものと思われるが、出土した墨書・刻書土器の量や須恵窯の黒笹14号窯式の灰釉陶器が出土している他、砥石が出土していることから鉄製利器の存在がうかがえられ、集落の中核的な住居であったことが想定される。

この時期の集落は既に集落内に中核的な役割をもつと考えられる大型住居とそれに付随する中・小型住居、掘立柱建物で構成される形態がみられるようになっているが、今回検出した住居址は長軸が5m程と規模的には中型の部類に入る。集落全体の規模と中核的役割をもつ住居の規模が比例する等のことが考えられるが、今回の調査は広範囲にわたるものでなく検出住居址が1軒のため同遺跡内にある同時期の住居址と比較することができず、現時点では資料不足でありこの住居址の性格についての結論は今後の資料の増加を待って検討しなければならない。

また、墨書土器についても今のところ出土事例が僅かであるため使用されている文字に共通性は見出せず検討を加えるまでには至っていないが、これについても今後課題として取組んでいく必要がある。

縄文時代の遺構としては縄文時代中期中葉末の住居址2軒を検出したが、双方ともに撹乱の影響を著しく受けていたため保存状態は良好ではなかった。しかし、河岸段丘の最上段まで集落が広がっていることが明らかとなったことで、同遺跡の位置する入沢川と梨ノ洞沢川に挟まれた舌状台地とその周辺は広範囲にわたり集落となっていたことが想定できるようになった。

特に同遺跡の東に隣接する天伯遺跡は昭和42年に調査が行われているが、トレンチ掘りを主体とした調査であるにもかかわらず、出土した縄文土器の量は久保上ノ平遺跡より僅かに少ない程度で、極めて高い密度で遺構のあることが想定される。これまで天伯遺跡に隣接した地域では同時期の集落は認められなかったが今回の調査によりこの一帯には天伯を中心に複数期にわたる大規模な集落群が埋蔵されていることがうかがえる。

今後、この地域を含め村内の遺跡分布と範囲の精査を改めて行い、保存対策をさらにおしすすめることが大きな課題になると思われる。

なお、最後になったが冬季の厳しい環境のなかで作業にあたって頂いた作業員の方々、本書の作成にあた

り多大なご尽力を頂いた関係諸機関におれを申し上げるとともに、ご指導、ご協力を頂いた先輩諸氏に改めて感謝し、ご教示を頂きながらそれを生かしきれなかったことをお詫びしたい。

第2表　1号住居址出土土器一覧

大別	種類	器種	数量	%	墨書・刻書の有無
食器類 (23点)	黒色土器 (内黒)	坏	15	65.2	墨書　5点「上」・「田八丈」か？ 不明（3） 刻書　1点「×」
		椀	2	8.7	刻書　1点「×」
		皿	2	8.7	無
	須恵器	坏	2	8.7	〃
	灰釉陶器	椀	1	4.35	〃
		皿	1	4.35	〃
煮炊具 (8点)	土師器	長胴甕	6	75.0	
		小型甕	2	25.0	
貯蔵具 (5点)	須恵器	長頸壺	2	40.0	
		短頸壺	1	20.0	
		甕	2	40.0	

第19図　1号住居址出土土器器種別構成図

第3表　出土土器観察表　No 1

遺構	調査No	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	胎土	焼成	色調 外面	内面	残存度	出土位置	備考
2号住	8－1	深鉢	12.0	5.5	14.8	ナデ	ナデ	砂粒多い	普通	にぶい黄橙色 10YR 7/4	にぶい黄橙色 10YR 6/3	2/5	床面直上	縄文土器。胴部の文様帯5単位。内壁に炭化物が付着。
	8－2	*	—	9.0	—	*	*	精良	良好	橙色 7.5YR 7/4	にぶい黄橙色 10YR 7/4	1/5	*	縦方向の2本1組の後帯文が器面を分割しその間を縦方向の比線で充填している。
	8－3	*	—	10.1	—	*	*	精良 (砂粒少量含)	普通	にぶい黄橙色 10YR 7/4	にぶい黄橙色 10YR 6/3	1/2	*	内壁に炭化物が付着しているほか、側面がみられる。底面に穴が開まれているが穿孔はしていない。
	8－4	*	21.1	—	—	ミガキ	ミガキ	精良緻密	良好	明赤褐色 2.5YR 5/6	橙色 2.5YR 6/6	1/25	床面	残存部は無文。底面は赤みを帯びている。
	8－5	*	30.3	—	—	ナデ	ナデ	精良緻密	*	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 6/3	1/5	床面 土坑2覆土	口縁部の突起3単位。内外面ともに丁寧なナデ調整。
3号住	12－1	深鉢	—	14.3	—	ナデ	ナデ	砂粒多い	普通	橙色 2.5YR 6/6	灰褐色 7.5YR 4/2	*	床面直上	内部底面で剥落が目立つ。
1号住	16－1	坏(土)	14.0	5.1	3.85	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラケズリ	精良	良好	灰黄褐色 10YR 5/2	黒色 10YR 2/1	7/10	床面直上	内面。器全体に歪みがみられる。内面に剥落部分あり。底部は回転糸切り未調整。
	16－2	*	15.2	6.1	4.5	*	*	*	普通	橙色 10YR 7/4	褐灰色 10YR 4/1	2/5	覆土中	内面。内面のミガキ調整が雑で、内面の炭素がほとんど剥落している。底部ヘラ切り＋ナデ調整。
	16－3	*	12.7	5.8	3.75	*	*	精良 (砂粒少量含)	良好	橙色 7.5YR 6/6	黒色 7.5YR 1.7/1	9/10	床面直上	内面。器側面に歪みあり。剥落不能。底部回転糸切り＋周辺を回転ヘラ削り。
	16－4	*	14.5	7.5	4.1	*	*	精良	*	にぶい黄橙色 10YR 7/4	黒色 10YR 2/1	2/5	覆土中	内面。器側面に「上」の墨付。底は回転糸切りで周辺部未調整。
	16－5	*	14.3	5.1	4.9	*	*	精良 (小石少量含)	*	橙色 7.5YR 6/6	黒色 7.5YR 2/1	ほぼ完形	床面	内面。側面に歪みあり。「田八文」か？内面は使用による磨耗が著しい。底部は回転糸切りで、周辺部未調整。
	16－6	*	—	5.92	—	*	*	精良	*	にぶい褐色 7.5YR 5/3	黒褐色 10YR 3/1	1/4	カマド底部・覆土中	内面。底部に歪みあり。剥落不能。底部は回転糸切りで周辺を回転ヘラ削り。
	16－7	*	—	6.45	—	*	不明	*	*	橙色 7.5YR 6/6	—	1/20	覆土中	底部に歪みあり。剥落不能。底部は回転糸切りで周辺部未調整。
	16－8	*	12.2	6.1	3.95	*	ロクロナデ ヘラケズリ	精良 (砂粒少量含)	*	にぶい橙色 7.5YR 6/4	黒色 7.5YR 2/1	ほぼ完形	床面直上	内面。器全体に歪みがみられる。内面に墨書で「×」がみられる。カマゴルシか？底部は回転糸切りで周辺部未調整。
	16－9	*	11.4	—	—	*	*	精良緻密	*	にぶい橙色 5YR 6/4	黒色 7.5YR 1.7/1	1/20	*	内面。口縁部が強く外反する。
	16－10	*	12.2	—	—	*	*	精良 (小石少量含)	*	にぶい橙色 7.5YR 6/4	黒色 7.5YR 1.7/1	3/10	*	内面。他と比べ器壁に厚みがある。
	16－11	*	14.2	—	—	*	*	精良緻密	*	橙色 5YR 6/6	黒色 7.5YR 1.7/1	1/20	覆土中	内面。内面の一部は剥落している。
	16－12	*	—	5.8	—	*	*	精良 (砂粒少量含)	*	にぶい橙色 7.5YR 6/4	黒色 7.5YR 1.7/1	2/5	床面直上 覆土中	内面。内面の3分の2が剥落。底部は回転糸切りで周辺部未調整。

第3表　出土土器観察表　No 2

遺構	図版No.	器形	法量 (cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	胎土	焼成	色調 外面	内面	残存度	出土位置	備考
1号住	16－13	坏(土)	15.2	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラとがキ	精良緻密	良好	にぶい橙色 7.5YR 6/4	灰褐色 7.5YR 5/2	1/20	床面直上	内面の炭素が消滅している。内面ヘラミガキは非常に丁寧。
	16－14	〃	15.5	—	—	〃	〃	〃	〃	にぶい橙色 7.5YR 6/4	明赤褐色 2.5YR 5/6	1/20	覆土中	内面の炭素が消滅している。内面ヘラミガキは非常に丁寧。
	16－15	〃	15.6	—	—	〃	〃	精良	〃	にぶい赤褐色 5YR 5/4	褐灰色 5YR 4/1	1/10	〃	内面の炭素が消滅している。内面ヘラミガキは雑
	16－16	鉢(土)	14.4	4.0	5.38	〃	〃	精良(砂粒少量含)	〃	淡黄橙色 10YR 8/3	黒色 10YR 2/1	2/5	カマド	内黒。器に歪みがみられる。内面に刷毛による「×」あり。底部は回転糸切りで貼付け高台。高台の断面は台角形。
	16－17	〃	15.7	7.0	5.65	〃	〃	精良緻密	〃	にぶい黄橙色 10YR 6/4	黒色 10YR 1.7/1	9/10	床面	内黒。歪みが少なくほぼ正円。底部は回転糸切りの後、貼付け高台がつく。高台断面は台角形。高台周辺の調整は非常に丁寧。
	16－18	皿(土)	13.6	5.2	2.3	〃	〃	精良緻密	〃	にぶい黄橙色 10YR 7/4	黒色 10YR 2/1	ほぼ完形	床面直上	内黒。全体的に歪みがみられる。底部は回転糸切りの後、貼付け高台。高台張合部の内側は雑だが、外側は丁寧な調整となっている。又、約半分程度の範囲でヘラの調整痕が残る。
	16－19	〃	12.0	—	—	〃	〃	精良	〃	にぶい黄橙色 10YR 6/3	黒色 10YR 2/1	1/25	覆土中	内黒。外側3分の1は剥落。
	16－20	坏(須)	12.4	5.5	3.3	〃	ロクロナデ	精良緻密	〃	灰黄色 2.5Y 7/2	灰黄色 2.5Y 7/2	1/2	床面直上 覆土中	全体に歪みがみられる。底部は回転糸切りで貼付糸調整。
	16－21	〃	12.9	—	—	〃	〃	精良(砂粒少量含)	〃	緑灰色 10YG 5/1	緑灰色 10YG 5/1	1/20	床面直上	
	16－22	皿(須)	15.0	7.1	2.4	〃	〃	〃	〃	灰白色 7.5Y 7/1	灰白色 7.5Y 7/1	完形	〃	全体に歪みがみられる。口縁部の先端が鋭角を調整となる。器壁が厚い。底部は回転糸切りの後、貼付け高台。高台の断面は台角形で、底部にトチンの痕が残る。施釉はハケ塗りで、内面は底の中心部を除き釉が掛かる。外側は器の約2分の1に施釉され、高台まで釉が掛かる。特徴から鎌倉14号窯式と思われる。
	16－23	椀(須)	16.0	—	—	〃	〃	〃	〃	灰白色 7.5Y 8/2	灰白色 10Y 8/1	1/25	覆土中	
	17－1	長胴甕	24.8	12.8	35.2	ヘラナデ	ヘラナデ	精良	〃	にぶい褐色 7.5YR 5/3	にぶい褐色 7.5YR 6/3	2/5	カマド 覆土中	内外面ハケ調整がみられる。外面はハケのカキ目はうすい。内面は中央より下はナナメ調整、上はヨコ調整で、転土の痕跡は綺麗に消されている。
	17－2	〃	19.6	—	—	〃	〃	精良(砂粒多く含)	〃	にぶい黄橙色 10YR 5/3	にぶい黄橙色 10YR 6/4	1/4	カマド横 床面直上	内面は口縁部のみハケのマコナデ、外面は口縁部下からタテのハケ調整。

第3表　出土土器観察表　No3

遺構	図版No	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	胎土	焼成	色調 外面	内面	残存率	出土位置	備考
1号住	17－3	長胴壺	25.1	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	精良	良好	にぶい黄橙色 10YR 6/4	にぶい黄橙色 10YR 7/4	2/5	カマド	
	17－4	*	24.2	9.2	33.5	ヘラナデ ハケ調整	*	精良雲母	*	褐灰色 10YR 5/1	にぶい黄橙色 10YR 6/3	3/5	カマド 覆土中	全体的に歪みが少なく、他のものより器壁が厚い。外面にハケのカキ目がみられる。
	17－5	*	21.3	—	—	*	*	精良	*	にぶい黄橙色 10YR 6/4	にぶい黄橙色 10YR 6/3	1/50	床面直上 覆土中	口縁を強く外反させようとしたと思われるが、作りが粗なため、外反が弱く見える。
	17－6	*	22.1	—	—	*	*	精良 (砂粒多く含)	*	にぶい黄橙色 10YR 6/4	灰黄褐色 10YR 5/2	1/50	*	外面にハケのカキ目がみられる。
	17－7	小型壺 (土)	16.6	—	—	*	*	*	*	灰褐色 7.5YR 5/2	にぶい黄橙色 10YR 6/4	3/10	*	外面は丁寧にハケ調整し、その後、雑なヘラナデを加えている。
	17－8	*	14.0	7.2	16.8	ロクロナデ	ロクロナデ	精良雲母	*	にぶい橙色 7.5YR 6/4	灰褐色 7.5YR 4/2	2/5	カマド・床面直上 覆土中	内外面にカキ目がみられる。底部には回転糸切り痕が残る。
	18－1	長頸壺 (個)	10.4	7.8	26.9	*	*	小石多く含む	不良	緑灰色 7.5GY 6/1	緑灰色 7.5GY 6/1	ほぼ完形	床面	ヒビ割れがあるもほぼ完形。底部に糸切り痕を残す。
	18－2	*	—	—	—	*	*	精良雲母	*	灰 色 7.5Y 6/1	灰 色 7.5Y 6/1	1/30	床面直上	自然釉が掛かっている。
	18－3	短頸壺 (個)	9.0	7.6	13.2	*	*	精 良 (小石少量含)	*	灰 色 7.5Y 7/1	灰 色 7.5Y 7/1	7/10	床面	底部は粗台でヘラ切り。一部に自然釉が掛かる。
	18－4	壺 (個)	—	—	—	ヘラナデ タタキ	ヘラナデ タタキ	精良雲母	良好	青灰色 5BG 5/1	青灰色 5BG 5/1	1/30	床面直上	
	18－5	壺	39.1	—	—	ナデ ヘラケズリ タタキ	ナデ タタキ	精良雲母	*	緑黒色 10GY 2/1	緑灰色 10GY 6/1	1/30	床面直上 覆土中	胴部の内外面にタタキ目が残る。また、一部に自然釉が掛かる。又、同一個体と思われる破片がみられる(図版16－2～4)

第4表　出土石器観察表

遺構	図版No	分類	石質	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	出土位置	備考
2号住	10－1	横刃型石器	砂質ホルンフェルス	6.8	13.4	1.2	152	床面	
	10－2	*	砂岩	5.0	6.3	1.6	40	覆土中	
	10－3	石鏃	黒曜石	(1.55)	1.75	0.35	1	P₂覆土中	先端部欠損
3号住	14－1	打製石斧	砂岩	12.7	5.05	1.3	145	床面直上	
	14－2	凹石	安山岩	(13.0)	5.35	4.8	346	*	大部分が欠損。両面に磨痕、敲打痕が残るほか、側面にも敲打痕がある。
	14－3	粗製刃器	砂岩	5.95	4.05	0.6	14	*	
1号住	18－6	砥石	凝灰岩	5.2	4.4	2.0	54	覆土中	4面ともに磨耗痕あり。

第5表　出土鉄製品観察表

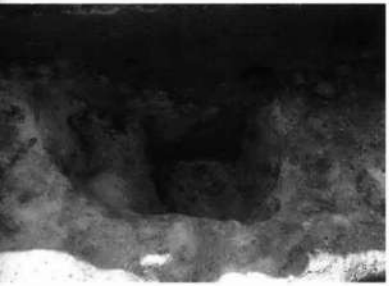
遺構	図版No	分類	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	出土位置	備考
1号住	18－7	鉄片	9.3	2.25	1.4	12	覆土中	薄い板状のものが重なりあっている。

図　　版

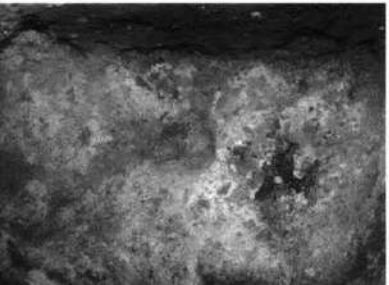
1．調査地
遠景

2．調査地
近景

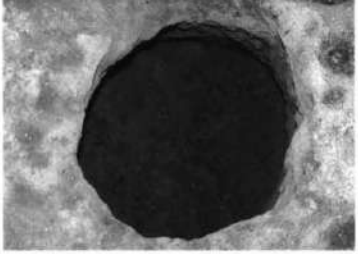
1．2号住居址
土坑1 全景



2．2号住居址
土坑2 全景

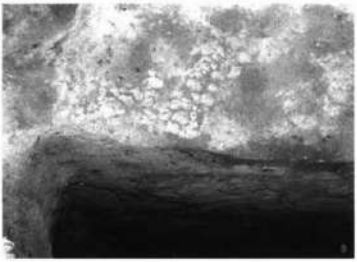


3．2号住居址
土坑2 底面状况



1．2号住居址 土坑3 全景

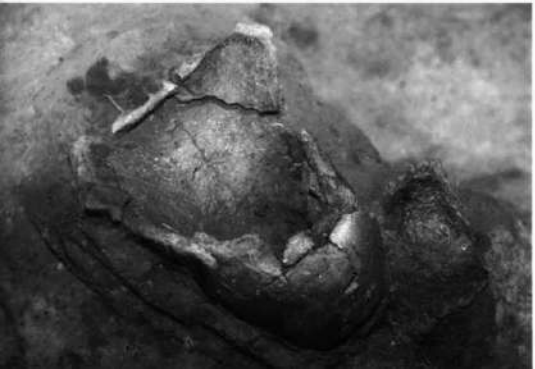
2．2号住居址 土坑3 土層断面



3．2号住居址 土坑3 覆土上面貼床

4．2号住居址 P₁土層断面

5．2号住居址遺物出土状況

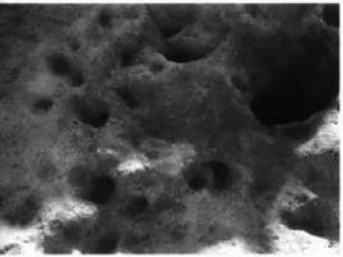


1～3
2号住居址
遺物出土状況

1．3号住居址
全景

2．2号住居址・3号住居址

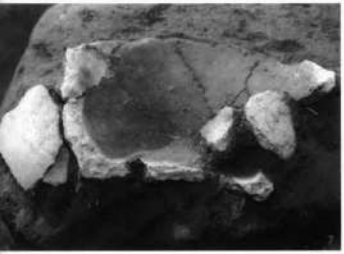
1～2
3号住居址
土層



3～4
3号住居址
炉址

5、3号住居址
P₁土層

6～8
3号住居址
遺物出土状況



1．1号住居址
遺物出土状況

2．1号住居址
全景

1．1号住居址出入口部分土層断面（南方より）

2．1号住居址東側（西方より）

3．カマド掘削状況（上方より）

4．カマド土層断面（南方より）

5．1号住居址カマド
遺物出土状況

1．1号住居址 カマド全景1（東方より）

2．1号住居址 カマド全景2（北東より）

3．1号住居址 カマドたち割り状況

4．1号住居址 カマド石組状況1（東方より）

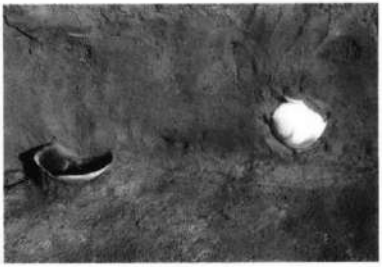
5．1号住居址 カマド石組状況2（南方より）

6．1号住居址 カマド石組状況3（上方より）

7．1号住居址 カマド石組状況4（北東より）

8．1号住居址 カマド掘方状況（東方より）

1～8　1号住居址 遺物出土状況

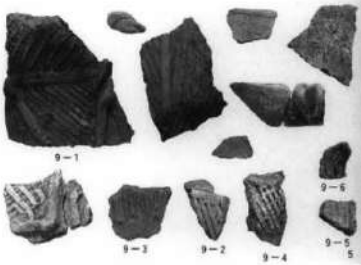


8－1　1

8－2　2

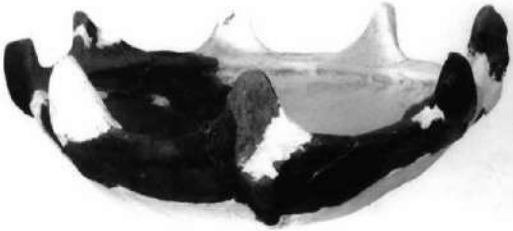
8－3　3

8－4　4



9－1　9－2　9－3　9－4　9－5　9－6　5

1～6　2号住居址
出土遺物



8－5　6

図版12

10－2

10－1

1

10－3

2

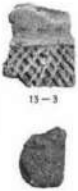
1～2
2号住居址出土遺物

12－1

3

13－1

13－2



13－3

4

5

14－1

14－3

6

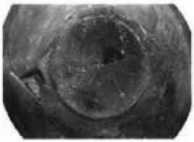
14－2

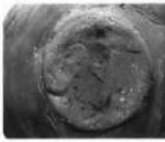
7

3～7　3号住居址 出土遺物

16－1　1

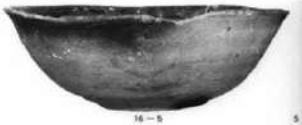
16－2　2



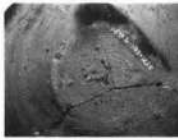


16－3　3

16－4　4



16－5　5



16－17　7

16－8　6

1～7　1号住居址 出土遺物1

1～9　1号住居址 出土遺物2

17－4　1

17－1　2

17－2　3

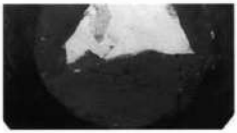
17－3　4

5

17－7　6

17－8　7

1～10　1号住居址 出土遺物3



17－5　17－6

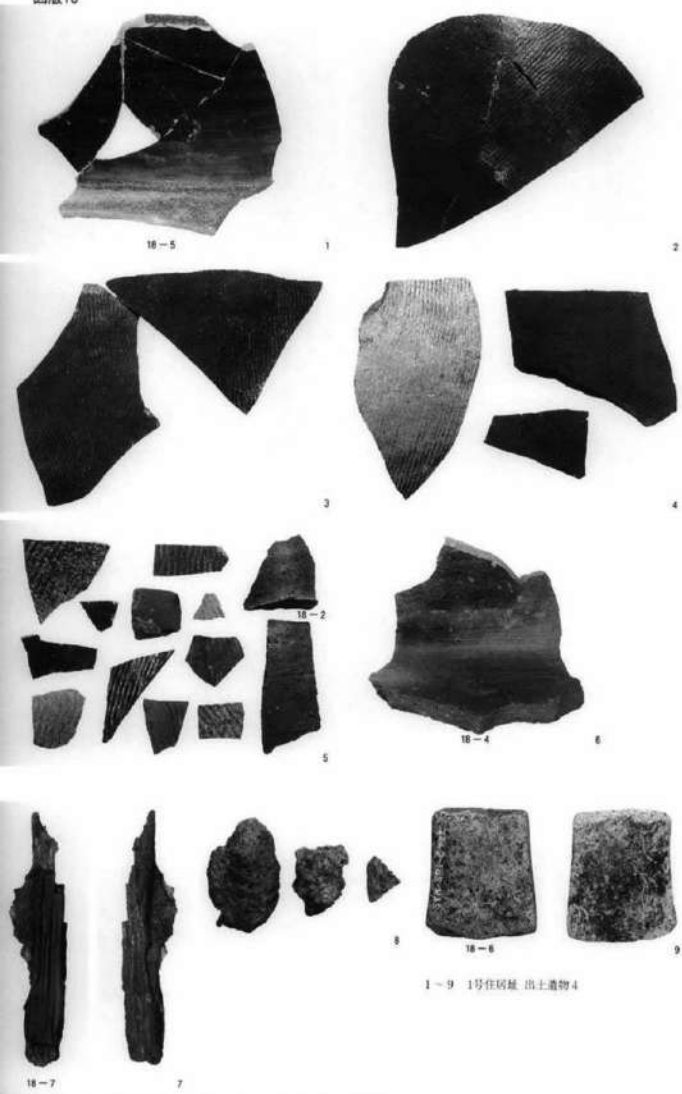
8

18－1　9

18－3　10

9 底部

10底部



1～9　1号住居址 出土遺物4

引用参考文献

長野県教育委員会　1972『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　上伊那郡南箕輪村その1・その2』

社団法人 中部建設協会　1985『天竜川上流地質図』

長野県史刊行会　1981『長野県史　考古資料編　全1巻(1)　遺構・遺物』

㈶長野県埋蔵文化財センター　1990『中央自動車道長野線　埋蔵文化財発掘調査報告書4　―松本市内その1―　総論編』

南箕輪村誌編纂委員会　1990『南箕輪村誌　上巻　自然編・遺跡編・信仰生活編』
『南箕輪村誌　下巻　歴史編』

南箕輪村教育委員会　1967『天伯遺跡緊急発掘調査概報』
1969『神子柴遺跡緊急発掘調査報告書（第3次発掘調査）』
1973『高根遺跡』
1975『大芝東遺跡』
1992『北垣外遺跡　宅地造成事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』
1993『箕輪遺跡　上伊那郡南箕輪村塩ノ井中田地区』
1994『宮ノ上墳墓　宮ノ上遺跡発掘調査報告書』
1997『久保上ノ平遺跡　墓地公園及び宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

報告書抄録

ふ り が な	しおのいやまのかみいせき
書　　名	塩ノ井山ノ神遺跡
副 書 名	村道4号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	南箕輪村埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
シリーズ番号	
編 著 者 名	友松　諭
編 集 機 関	南箕輪村教育委員会
所　在　地	〒399-4592　長野県上伊那郡南箕輪村4840番地1　　TEL (0265) 76－7007
発 行 年 月 日	2003年3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
塩ノ井山ノ神遺跡 (しおのいやまのかみいせき)	長野県上伊那郡 (ながのけんかみいなぐん) 南箕輪村683-2 (みなみみのわむら) 他	20385	50	35° 52′ 49″	137° 58′ 48″	20011119 / 20011226	288㎡	村道4号線拡幅工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
塩ノ井山ノ神	集落址	縄文 平安	縄文中期住居址　2 平安前期住居址　1	縄文土器　深鉢 石器　石斧・石鏃 須恵器　長頸壺 短頸壺 坏 土師器　長胴甕 小型甕 黒色土器　坏 椀 皿 灰釉陶器　皿 砥石・鉄滓・鉄片	平安時代前期（9世紀中葉）の住居址で食器具・煮器具・貯蔵具類が良好な状態で出土。

村道４号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

塩ノ井 山ノ神遺跡

平成15年３月26日　発行

編集　長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

発行　長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

印刷　ほおずき書籍株式会社